年間第３主日

第一朗読　ネヘミヤ８・2-4a、5-6、8-10
第二朗読　一コリント 12・12-30
福音朗読　ルカ２・1-11

2025.1.26　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

２週間前に、わたしたちは主の洗礼の祝日のごミサをお捧げいたしました。その時に洗礼を受けられたイエス様に聖霊が鳩のような形で降(くだ)った(ルカ 3・22)っていうところがありましたけども、今日の福音はその聖霊とは何であるのかを明らかにしてくれています。イエス様が受けた聖霊とは何かを語るのが預言者イザヤの言葉だったというふうにつながっていっていると言うことができます。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

聖霊とは、何か物事を自分の思い通りに動かす力でもなければ、感情的な高揚感でもない。むしろ、困難にある人のところに行って助けようとする心の動きというか、神様の呼びかけなんだというふうにイエス様が受け取った、そういう箇所です。

でも今日の箇所は、ただ単にイエス様がその霊を受けられた方であるということだけを言っているのではないと思います。イエス様は最後に「この聖書の言葉は今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言い添えられる。「あなたがた」っていうのは、その会堂に集まっていたイエス様の故郷(ふるさと)の人たちだし、また今日そのみことばを聞いているわたしたちでもあります。イエス様だけではなくて、その周りに集まった人も、今集まってるわたしたちの上にも主の霊がおられて、そして貧しい人に福音を告げ、主の恵みの年を告げるために遣わされるんだ、あなたたちも、という、そういう意味でこのみことばが実現している。聞き手が受け取ったんだから、っていう意味も含んでいると言えるでしょう。

今日、神のみことばの主日ですが、神様のみことばに耳を傾けましょうっていうのは、聖書のことをよく読んで物知りになりましょうということではありません。その言葉を通して、それがわたしたちにも向けられているんだということの中に、信仰生活を送っていく土台の上に、その呼びかけに耳を傾けましょうということであると思います。

でもそう言われても、わたしには捕らわれている人を解放することも、目の見えない人に視力の回復を告げることも、圧迫されている人を自由にすることも、そんな力がありませんって思います。でもだからこそ、主の霊がわたしたちの上におられるわけです。わたしたちの力によってではなくて、神様の導きによって、イエス様とつながり、そしてイエス様とつながることを通してみんなで協力して、困難にある人のことを思い起こし共に歩む、その重荷を取り除こうとするって、そういう呼びかけです。

今日の第二朗読は、みんな一つの体に呼び集められたんだ、と。それはイエス様の体、イエス様と共に働く者という意味です。それぞれの働きがあるんだということです。わたしたちが自分の中にある問題だけではなくて――自分の問題ももちろんある――だけではなくて、他の人の重荷にも思いを向けて、そしてそれを共に担っていこうとするときに、わたしたちはイエス様の、神様の力をいただくと言うことができます。

今日はもう一つは「世界子ども助け合いの日」です。そのように困難にある人――自分のことだけではなくて困難にある人――のために何かをしようとするっていうことは、どんなレベルにおいても神様が呼びかけられていることなんですっていう中で、特に子どもたちも――子どもたちだから関係ないっていうのではなくて――いろんな中で自分のことだけではなくて色々なことで困っている人、あるいは世界中っていう――世界でいろんなことが起こってるっていうのを今の子どもたちはよく知っています。受験があるからかもしれませんね。だけどそれは知識としてではなくて、それを自分と関係する、自分が何かそこに何かをする、あるいは何かつながっていくように呼ばれているんだというふうに見る、そのように励まし合うっていうのが今日の「世界子ども助け合いの日」の趣旨だと思います。本当だったら教会学校などでこのことについてお話する機会が持てたら良いのですが、なかなかそういうことになってないので、でき

ればお子さんがいるお家は、今日の「世界子ども助け合いの日」について話してほしいなと思うんです。

それとつながるんですけども――今日は盛りだくさんなんです――今日はまた東京教区においては「ケルン・デー」でもあります。ケルンというドイツの町です。ドイツの教区ですけども、戦争が終わった後(あと)、ケルンも戦争によって破壊されている中で、でも自分たちのことだけではなくて同じ困難にある具体的な誰かのためにっていうことで、ケルンの人たちは当時の枢機卿様の呼びかけで東京教区を援助するということを決めて、たくさんの霊的なまた物質的な援助によってわたしたちの教区を支えてくれたわけです。

ご参考までにケルンの援助によって教会が設立されたり、また既にある教会でも聖堂やその他の施設が新しく建ったりした、その教会を挙げますと、まず最初にはカテドラルそして、板橋、関町、小岩、清瀬、町田、青梅、北町、蒲田、五日市、荻窪、大島、志村、船橋、高幡、梅田、そしてイグナチオ麹町、そして目黒教会です。これらの小教区、そしてまた東京カトリック神学院や上智大学などの教育施設のいろんなことと、それから当時のカトリック系の福祉施設で働いている人たちの給与の一部にも援助はあったというふうに記録には出ています。ちなみにわたしは船橋教会なんで、本当にそのケルン教区のおかげで船橋教会ができたというようなことなんです――今は引っ越して習志野教会になってますけども。

それは、ただ困ってる人を助けましょうというだけではなくて、そのことを通してケルンの、自分たちの教会も復興するんだっていう、つまり物質的な建物の復興だけではなくて、信仰の復興です。自分のことばっかり考えるではなくて、他の誰かにいつも心を向ける、イエス様と共に心を向けるという具体的な業において、当時のケルンの枢機卿様の呼びかけは、もちろん東京教区を助けたとともに、それによって自分たちの教区も復興するんだっていう、その精神において、というふうに始められた、というふうにつながってます。

わたしたちもそれぞれが「いろんな困難が解決してから」っていうことではないんです。みんな、困難がない人はいない。しかしその中ででも他の誰かに心を向けることを通して、そしてそれはいろんなレベルで――たとえボランティア活動とかで活躍できないような病気療養中の方であっても、その病気療養中の一日をイエス様の十字架とのつながりの中でお捧げするっていう思いで過ごす、

そのこともちろんキリストの体の一部であるその働きと言うことができるわけです。その働きがどのように他の人の救いにつがっているかは神様のもとで明らかにされる場合もあるし、また具体的に目に見える結果として与えられる場合もあるけれども、それぞれがそれぞれのところでイエス様と共に働くことができるし、また「じゃあ、それぞれのところで」っていうバラバラではなくて、「お互い同士が助け合いながら」っていう思いが大切です。

最後に、今日はこの高円寺寺教会の総会でもあります。わたしたちがイエス様と共にあるということは、自分の問題の中に閉じこもるばかりではなくて、問題を抱えながら、直面しながらも、でもいつも困難にある他の誰かのために遣わされているんだという思いをいつも失うことなく、いつも真ん中にいらっしゃるイエス様と共に歩む共同体でありますように。全世界のカトリック教会も、またこの東京教区も、この高円寺教会も、そして一人ひとりのそれぞれの生活の上にも、聖霊の導きお願いながら、このごミサを通して互いのために祈り合いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi

携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/